

藤田昌久/ジャック・F・ティス=著 徳永澄憲/太田 充=訳

集積の経済学

—都市, 産業立地, グローバル化—

2017年2月発行
 本体6,000円+税
 東洋経済新報社
 ISBN 978-4-492-31493-7



赤松 隆
 AKAMATSU, Takashi

東北大学大学院情報科学研究科教授

本書は, Masahisa Fujita and Jacques-François Thisse, *Economics of Agglomeration* (Second Edition), Cambridge University Press, 2013の日本語版である。空間経済学・地域科学分野の2人の巨匠によるこの原著は, 様々な空間規模(都市内・地域間・国際)における立地集積現象に関するミクロ経済学的理論を包括的かつ体系的にまとめた専門書である。

原著の第一版は, 2002年の刊行後すぐ, 国際的に極めて高く評価され, この分野の研究者・大学院生必携の書であった。2013年に出版された第二版は, 初版刊行後10年間のさらなる空間経済学分野の研究の進展を反映し, 全面的に改訂されたものである。この第二版は, その洗練された内容から, 今後も必読書であり続けるであろう。日本語版は, この分野の研究者である徳永澄憲・太田充の両氏による, 第二版の翻訳である。訳は正確で, かつ原文のやや難解な箇所を読みやすく意識する工夫も随所でなされている。さらに, 原著の誤植や誤りも, 原著者の藤田昌久教授との議論の上, 修正されているとのことである。従って, 評者があれこれ述べるまでもなく, 本書(原著および日本語版)は, 空間経済学(都市・地域・国際経済学, 立地論, 産業組織論)および地域科学分野の研究者・大学院生にとって必読・必携の書であることは間違いない。

ただし, 一般に, ある特定分野の研究者向けの必読書は, 必ずしも他分野の研究者や実務家にとっての良書とは限らない。この書評が掲載される「運輸政策研究」の多くの読者(空間経済学の研究者ではない交通・土木計画分野の研究者/実務家)に対しても, 本書は有用な書物であろうか?

結論を先取りすれば, 「極めて有用」であろう。まず, 本書の記述スタイルで注目すべき特徴は, 各章が必ず長い(5頁前後に及ぶ)「はじめに」で始まっており, 以降の節で展開される理論の背景や基本的なアイデア・論理が丁寧な文章で説明されていることである。詳細な数学的記述を追う余裕のない多忙な実務家も, 各章の「はじめに」と「結論」を通読すれば, 理論のエッセンスや含意を理解し, 空間経済学の全貌を俯瞰することができるであろう。また, 「はじめに」以降の理論編も, 体系的かつself-containedな記述スタイルで貫徹されており, 理工系学部レベルの数学とミクロ経済学の基礎知識

(と500頁超を読破する時間と根気)さえあれば, 全ての内容を理解できる。実際, 評者も, (原著者の盟友であられた森杉壽芳教授を中心とする)土木計画分野の研究者仲間と原著初版を輪読したが, 空間経済学の研究者でなくとも十分に楽しむことのできる—交通・土木計画等の分野における研究課題を考える上でも示唆に富む知見や視座を得ることができ, さらに, 空間経済学分野の研究への新規参入意識をも刺激される—内容であった。

本書の極めて多彩かつ洞察に富んだ内容を, 限られた紙面で具体的に紹介することは難しいため, 最後に, その構成のみ簡潔に示しておこう。本書は4部構成である。本書全体を展望する第1章に続く第I部(2~5章)は, 空間経済学の基礎理論を議論している。第II部(6~7章)は, 都市圏の構造, すなわち, 都市内スケールでの立地集積(都心・副都心や商業集積の創発)を扱っている。これは, 主に都市経済学分野で研究が蓄積されてきた集積立地理論である。第III部(8~9章)は, 生産要素の移動と産業立地, すなわち, 地域スケールの産業集積の創発を扱っている。これは, いわゆる「新経済地理学」の理論である。第IV部(10~11章)は, 都市システムの出現, 地域の成長といった都市内~地域スケールにまたがる課題に加え, 初版刊行後に現れたグローバル化にともなう新たな課題(e.g., 企業立地のフラグメンテーション)を扱っている。

以上要するに, 本書は, 広範かつ奥の深い空間経済学の理論を体系的に学習できる稀有の書である。空間経済システムに興味を持つ多くの方にぜひ一読を勧めたい。

蛇足: 本書の難点(学習上の注意点)を取上げて挙げるなら, その内容が, あくまでも5年以上前までの「最新」理論に基づいている点である。空間経済学分野では, 原著第二版の刊行後も, 理論・実証の両面で様々な新たな研究の進展—例えば, 集積メカニズムの汎用的な数理解析法の出現やそれに基づく集積経済モデルの体系化・計量化の進展等—が続いている。このような最新の空間経済学の理論の進展については, 原著者が古希を超えてなお斬新な研究が続けられていることに鑑みれば, また近い将来, さらに内容が拡充・洗練された第三版に反映されるであろう。